

# 先住民族と迷惑施設に関する研究 —アイヌの人々は「核のごみ施設」立地計画をどう思うのか—

吉 井 美知子\*

## A Study on Indigenous People and Troublesome Facilities —What does Ainu People Think about the Project of Nuclear Waste Disposal Site—

YOSHII Michiko

### 要 旨

2020年、北海道西部の二自治体が、原発から出る核のごみ最終処分場の立地調査受け入れを表明した。この計画を先住民族アイヌの人々はどう考えるのか。調査からは原子力がアイヌの精神文化と相いれないこと、しかしアイヌには反対の声を上げにくいことが判明した。それでもイベントで勇気を持って反対意見表明をした15人のアイヌの人々がいた。

なお本研究は沖縄大学地域研究所共同研究班による研究活動の一環として実施したものである。

キーワード：アイヌ民族、核のごみ、寿都町、神恵内村、泊原発

### はじめに

#### 1. 背景

日本では2011年の福島原子力発電所事故前の時点で全54基の原発が稼働していた。2021年12月現在、そのうち9基が発電を続けている（原子力規制委員会2021）。しかし、発電後に使用済み核燃料の再処理を経て出る高レベル放射性核廃棄物（以下、「核のごみ」と記述する）については最終処分場の立地が定まっていない。

1981年、北海道の北部、天塩郡幌延町（てしおぐん・ほろのべちょう）に地層処分場の設置の話が持ち上がった。しかし市民や道議会の反対で一旦白紙になるなどの紆余曲折を経て、2001年より処分場ではなく放射性物質を一切持ち込まない研究施設として稼働している。

\* 沖縄大学人文学部

幌延を断念した国は2000年に原子力発電環境整備機構（以下略称の“NUMO”を用いる）を設立、放射性核廃棄物の地層処分を進めるために全国の地方自治体より処分場の受け入れ希望を募り始めた。

2007年、高知県安芸郡東洋町（あきぐん・とうようちょう）から首長の強い意志により初の応募があったが住民の大反対により頓挫、その後は特に手を挙げる自治体もなのまま十数年が経過していた。

2020年10月、北海道後志（しりべし）管内寿都町（すつつちょう）が遂に応募を申し入れる。後を追うように、同管内の神恵内村（かもえないむら）も同月、受け入れ

の意志を表明した。応募を表明すると当初の2年間、設置の可能性を確認するための「文献調査」が実施され、毎年10億円の交付金が国から自治体に支払われる。文献調査に合格すると今度は2年間の「詳細調査」、さらに2年間の「実施調査」を経て建設の運びとなり、万一建設に至らなくても自治体には大きな収入が見込まれる。

2021年9月、筆者が調査に訪れた両自治体ではすでにNUMOの現地事務所が置かれ、文献調査が進められていた。

## 2. 目的

高レベル放射性廃棄物地層処分場は、単に地下300mの深い穴を掘って埋めて終わりではない。10万年の管理が必要とされる猛毒の高レベル放射性廃棄物を、長期間安全に管理しておく必要がある。このような施設をアイヌモシリ（「人の住む場所」の意のアイヌ語）に作ることを、先住のアイヌ民族はどのようにとらえているのか。報道では反対の市民運動が立ち上がったとは伝えられても、2021年夏の時点でアイヌの人々の声はまったく報道されていなかった。

主として明治維新以降に移住してきた和人<sup>1</sup>に比べ、はるかに長い年月をアイヌモシリで暮らしてきたアイヌの人々は、故郷に建設が取りざたされるこの計画をどう思うのか。本稿ではごく限定的な調査の範囲内で明らかになったことを報告する。

## 3. 方法

計画の概要、アイヌ民族や地域の歴史について文献調査を進めると同時に、2回のフィールド調査を実施した。1回目は2021年8月～9月の聴き取りおよび寿都町、神恵内村での現



図1：北海道地図と関連地点の位置  
出典：新聞「農民」（2020）をもとに筆者作成

<sup>1</sup> 本土出身の日本人を指す。沖縄での「ナイチャー」に相当。

地調査、2回目は同年11月の聴き取りおよび関連イベント参加である。本稿ではこのうち、アイヌの人々およびアイヌ文化研究者への聴き取り調査と関連イベント参加に関する報告を行いたい。

## I. 聴き取り調査

2021年8月から11月にかけて、北海道在住のアイヌの方々計4名、和人のアイヌ文化研究者1名からの聴き取りを実施した。アイヌの方々はアイヌ語で「エカシ」と称される長老を含み、全員が中高年男性である。以下、氏名、肩書、年齢、聴き取りの日時と場所、聴き取り内容の順に報告する。

### 1. アイヌ民族

#### (1) A氏

8月30日(月) 13:00~14:10 於札幌市内

アイヌの世界観は自然と向き合うものであり、人間の力が及ばない核はアイヌにとって積極的に受け入れられない。人間の手に負えなくなるものは作ってはならないと先輩から教わった。

北海道開拓150年といわれているが、アイヌが住む大地に多数者が入植した歴史である。その多数者が地元アイヌの生活や文化、現状に配慮しない開発計画を進めてきたことが問題となっている。

二風谷(にぶたに)ダム<sup>2</sup>も同様に、反対運動が起こった。泊原発、幌延の研究所についてもアイヌから懸念や反対の表明があったが、組織的な反対運動にならなかった。

自らをアイヌと表明する人の数は1万数千人、表明しない人も多く、実際には数万人とも数十万人ともいわれている。原子力発電は、政府や企業が始めたもので、そこから出る廃棄物をどうするかは全国民が自身の問題として考える問題で、アイヌに反対運動を押しつけないで欲しい。

#### (2) 山丸和幸(やままる・かずゆき)氏

白老(しらおい)町在住、建設業、73歳

9月2日(木) 14:15~16:00 於白老町内

白老町は人口1万7千人、アイヌ協会員は230名だが、実際には人口の1割超、2千人以上のアイヌが住む。最近ウポポイ<sup>4</sup>が開かれた。

泊原発が計画された頃、アイヌは日々の生活に追われていたため原発問題などに目を向ける余裕がなかった。その後、3.11の福島原発事故で初めて自分は原発の恐ろしさに気づいた。

その後寿都町の調査同意を機に、反対するようになった。核のごみはすでに出ていて、海

<sup>2</sup> 北海道沙流郡に1997年に建設されたダム。アイヌコタンの水没や聖地の破壊を伴うため、大きな反対運動が起き裁判にもなり、アイヌ民族を先住民族として公認する契機となった。

<sup>3</sup> 2020年に国が設置した民族共生象徴空間。国立アイヌ民族博物館を含む。

外に輸出するわけにもいかないの、どこか国内で引き受けざるをえない。しかし、順番が違う。まず原発を止めてごみの総量を確定したうえで、国民的議論をして立地を決めるべきであり、札束で頬を張るような方法はいけない。

核は一旦何か起こると手に負えない悪魔であり、核のごみは大地のカムイ（神）の手には負えない。個人的には北海道の大地に埋めることに反対だ。大地のカムイへの感謝という精神文化を大切にしたい。

(3) 加藤敬人（かとう・たかと）氏

函館市在住、学校経営、66歳

9月3日（金）20：00～21：30 於千歳市内

北海道にアイヌ系の人々は50万人くらい、しかしアイヌ協会員は1万5千人くらいしかない。独立というようなことは無理でも、せめてイオル（狩場）を返してほしい。長らくアイヌは空、海、湖、山、川から恵みを受けて動物、魚、植物を採って生活の糧にしてきた。そこを和人が国立・国定公園に指定したことで、火を焚いてカムイに祈ることさえもできなくなった。

自分は2008年から2009年にかけて、大間原発反対運動をしていた。チェルノブイリ事故で原発に疑問を持っていたからだ。大間は函館からわずか二十数キロの対岸にあり、海を挟んでよく見える。函館市民は皆反対している。

アイヌ協会本部も、阿寒のアイヌも皆、原発には反対している。しかし泊原発の地元にはアイヌがいない。

核のごみは日本国内で処分するしかない。心情的には国会議事堂や皇居の地下に埋めてほしいと思う。寿都町や神恵内村の首長は盗人猛々しいと言わざるを得ない。元々はアイヌが住んでいた場所だ。泊原発で地元に着る交付金を見て、自分のところにも欲しくなったのだろう。

(4) 石井ポンペ 氏

札幌市在住、原住・アイヌ民族の権利を取り戻すウコ・チャランケ<sup>4</sup>の会 代表、

元札幌市職員、76歳

11月13日（土）10：40～11：45 於札幌市内

寿都町、神恵内村に核のごみ施設を設置することに反対である。そもそも原発は人間のコントロールがきかないものであり、受け入れられない。すでに稼働した泊原発の分のごみだけ、やむを得ないので泊の地上で保管するべきだ。

泊、寿都、神恵内の地元にもうアイヌはいない。たとえ今の居住地から離れていても、アイヌとしてとにかくアイヌモシリを汚さないでほしいという思いだ。

アイヌ協会も、アイヌの若者たちも皆内心では反対だが、それを表明しない。少数派であ

<sup>4</sup> ものごとを多数決でなく話し合いで決めるというアイヌの伝統を指す名称。

るアイヌには、国の方針に反対するような声はなかなか上げられない。

1997年に旧土人保護法がアイヌ文化振興法に置き変わった。保護がなくなったことでアイヌは生活が難しくなった。そして文化振興だけに偏って先住権や環境権が無視されている。

自分は公務員だったので生活の安定が得られていた数少ないひとりである。当時の札幌市職員にアイヌは2人だけだった。

今夜の講演会では自分も出番を予定している。

## 2. アイヌ民族研究者

本田優子 氏

札幌大学アイヌ文化教育研究センター長 教授

8月30日(月) 15:30~17:30 於札幌大学 同教授研究室

核のごみ施設を北海道にだけは絶対作ってはいけない。ここは江戸時代までは海外だったが、日本の領土となり明治2年に「北海道」と命名されている。その時の統合よりももっとひどい行為だ。

アイヌ文化を尊重している和人のひとりとして、アイヌ民族に対して非常に恥ずかしい。

もともと泊、寿都、神恵内の位置する北海道の日本海側には、コタンがありアイヌが多く住んでいた。しかしニシンが多く獲れることから和人が押し寄せ、強制労働や天然痘の影響でアイヌがいなくなった。開拓者の和人は東北六県の次男、三男坊が中心であった。今住んでいる人々には土地への愛着が少ない。

東京で使う電気のために、発電は福島、ごみは北海道というのはおかしい。

## II. 核ゴミ問題を考える北海道会議 in さっぽろ

### 1. プログラム

2011年11月13日(土)かでの2.7<sup>5</sup>に於いて「核ゴミ問題を考える北海道会議 in さっぽろ」と題したイベントが、同会議の主催で開かれた。

「核ゴミ問題を考える北海道会議」は2011年3月に弁護士、学者、市民らが呼びかけて設立された団体で、「核ゴミ問題を北海道全体の問題として考えるために、道民の関心を喚起し、情報を共有しながら論議を深め、合意形成をはかっていくための公論の場をつくる」ことを目的としている(同会議HP)。呼びかけ人には、本稿I. 2. で聴き取りを行った本田優子氏も含まれる。

イベントは午後2時から夜8時30分までの長時間にわたり、パネルトーク、ワークショップ、全体集会の三部構成となっていた(表1参照)。

<sup>5</sup> 北海道立道民活動センター。〒060-0002 北海道札幌市中央区北2条西7丁目 TEL 011-204-5100, <http://homepage.kaderu27.or.jp/>

表1：「核ゴミ問題を考える北海道会議 in さっぽろ」のプログラム

日 程	2021年11月13日（土）
会 場	かでの2・7大会議室&かでのホール （札幌市中央区北2条西7丁目 道民活動センター）
プログラム	開場13：30～ 会場：かでの2・7大会議室 14：00～15：20 <b>第1部 パネルトーク「考えよう！北海道の未来と核ゴミ問題」</b> 各界からのパネリストの皆さんのトークとディスカッション コーディネイター 外岡秀俊さん（ジャーナリスト） パネリスト 上田文雄さん（元札幌市長・弁護士）ほか
	15：30～17：00 <b>第2部 ワークショップ「話さる会ーみんなで話そう！北海道の未来」</b> グループに分かれての参加者による自由な対話と交流の場
	開場18：00～ 会場：かでのホール 18：30～20：30 <b>第3部 全体集会「アイヌ民族と北海道の大地」</b> 講演会 宇梶静江さん（アイヌ古布絵作家） トークセッション 宇梶静江さん×本田優子さん（札幌大学教授）
参加費	1000円（第1～3部の全てのプログラムに参加できます） 学生・子どもは無料
主 催	核ゴミ問題を考える北海道会議

出典：核ゴミ問題を考える北海道会議HP

第1部のパネルでは弁護士や市民運動家など数名の登壇者、そしてフロアから福島からの避難者や寿都町民などの発言と討論があった。会場は補助席を用意するほどの盛況で、参加者の熱気が感じられる討論であったが、残念ながらアイヌ民族に言及したのは全員が和人のパネリストのうちひとりのみであった。フロアのアイヌの人々からの発言もなかった。

第2部のワークショップは、参加者全員が数名のグループに分かれ、各々が核ごみに対する意見を述べた。グループ内で一部の成員に発言が偏らないよう工夫されていた。筆者のグループ内は和人ばかりであった。

第3部の全体会議は、同じ建物の1階の大ホールで夜間に開催された。プログラムには、以前より反原発の意見発信をしている首都圏在住のアイヌ女性作家、宇梶静江氏の講演会とだけ記されている。タイトルは「アイヌ民族と北海道の大地—北海道の歴史から未来を考える—」とある。

講演内容は概ね著書（宇梶2020）に沿ったもので、自身の生い立ちからアイヌの精神文化、そして3.11の福島原発事故から現代文明への疑問を説き、アイヌの視点で核のごみ施設への反対を呼びかけるものであった。1933年生まれの高齢ながら、しっかりとした口調で語りかける講演には説得力と迫力があつた。

休憩後には司会の本田優子氏との対談もあり、なごやかな雰囲気イベントが終わろうとしていた。午後の第1、第2部とは異なりようやくアイヌ民族の視点を取り上げられたと満

足し、帰ろうとしたところに意外な展開が用意されていた。

## 2. プログラム外のメインイベント

司会の本田氏が、「実はこれからがメインイベントです」と突然切り出して、客席で講演を聴いていたアイヌ民族の出番になった。促されて席を立ち、続々とステージに上がる人々。その中には本稿で報告した聴き取り対象者の山丸氏や石井氏の姿もあった。高齢男性だけではない。老若男女、宇梶氏を入れて全15名のアイヌの人々がずらっと舞台上に並んだ姿は圧巻であった（写真1参照）。



写真1：舞台上のアイヌの人々

出典：核ゴミ問題を考える北海道会議HP

以下、報道記事より、代表でマイクを握った人々の発言を引用する：

「一人の道民として、一人のアイヌとして、核にごみを持ち込ませてはならないという気持ちでこの場に立っている。みんなの先人が大事に守ってきたこの土地を守ろう。」(…)

「豊かな自然は次世代からの借り物で、傷つけずに引き継ぐべきだ。」(北海道新聞2021)

聴き取りでも明らかになったように、国策に逆行するような発言をすることはアイヌの人々にとって大変難しい。そんななかでも、高齢の有名作家で自由な発言のできる宇梶氏を招へいし、その講演会という場で勇気ある人々が舞台上上がって意見を表明したことは画期的であったと考える。またそのような場を準備した本田氏の力量には大いに感銘を受けた。

## Ⅲ. 考察—調査からわかったこと—

### 1. アイヌの精神文化と核のごみ

聴き取ったすべてのアイヌの人々とイベントでのアイヌ登壇者から、アイヌの精神文化と核のごみ施設がまったく相容れないものであるとの発言があった。「人間がコントロールできず、土に還せないものを作ってはならない」というアイヌの教えに完全に正反対の方向にあるのが、原子力発電であり、そこから出る核のごみだといえる。コントロールできないからこそ原発事故が起き、埋めても土に還らないそのごみをどうするかが問題になっている。

### 2. アイヌモシリと北海道

北海道は琉球王国と同じく、明治初期に日本本土に併合された。アイヌの人々にとってはあくまでアイヌモシリであり、和人は後からやって来た闖入者に過ぎない。その和人が持ち込んだ「便利なもの」がアイヌの大地を汚すばかりか、日本本土でできたごみまで持って来て埋めることを、アイヌの人々は拒否する。

日本全土を守るためとして置く米軍基地が沖縄に集中するのと同様に、日本全国の核のご

みを北海道に集めて埋めることは、たとえ近隣に住んでいなくてもアイヌの人々の心情が許さない。辺野古から遠い那覇市内や離島に住んでいる沖縄人が、埋め立てに反対するのと同様である。

### 3. 声を上げにくい構造

石井氏からの聴き取りでは、公務員として生活の安定が得られていた数少ないアイヌであったからこそ、環境保護の声を上げられたとの話があった。そうでない人々には、当然声は上げにくい。

また、聴き取りのなかでは意見表明がアイヌ同士の分断を招くのが心配だという発言もあった。その意味でも、11月のイベントで舞台上がったアイヌの人々は、本当に勇気があったといえる。

なお金を用いて地域を分断する方法は、原発立地においても本土の各地で普通に用いられている。沖縄振興予算と基地受け入れを関連づけるのも同様の手段だと考えられる。

### 4. 寿都町と神恵内村

両自治体は北海道後志管内の日本海に面し、泊原発にも近い。泊村に隣接する神恵内村には泊原発受け入れの交付金も出ている。

もともとアイヌのコタンがあったことは、アイヌ語起源の地名からもわかる。しかしニシン豊漁により大挙して押し寄せた和人の下で強制労働させられたことや、持ち込まれた天然痘でコタン全滅になるなどの歴史を経て、現在はアイヌが住んでいない。地域のアイヌ協会もない。

和人だけの自治体で、それぞれの首長が唐突に核施設の受け入れを表明している。表明して2年間の文献調査を受け入れただけで、20億円の交付金が出る。これを「盗人猛々しい」と表現したのは、アイヌの加藤氏であった。

形だけでも意見を伺うべきアイヌ協会さえもなく、すでに原発の交付金が落ちている地域ということで、両自治体には手を上げやすい条件が揃っていたといえよう。同時に、アイヌの人々にとっては、現在その地域に住んでいなくてもやはり守るべきアイヌモシリの大地であることに変わりはないようである。

## おわりに

本稿は北海道の二自治体が核のごみ施設受け入れを表明してから1年ほどの時期に、先住民アイヌの人々の意見を、聴き取りとイベント参加を通して調査したものである。聴き取り対象の年齢層や性別が偏り、人数も限られる短期間の調査ではあるが、その結果からはいくつかの示唆が得られた。以下に四点を挙げる。

第一に、この核のごみ問題を、受け入れを表明した両自治体だけに關するものと矮小化することの非合理性である。核のごみは全国から発生したもので、各原発で生産された電気は首都圏や関西圏など、主として大都市で大量消費されている。



NUMOによる施設立地受入れ促進事業には、大都市で発生した消費がもとでできたごみであるという観点が抜け落ち、ひたすら交付金と引き換えにそれを遠隔地に立地させようという意図が見られる。本来は国全体で議論をして処分方法と立地を検討すべきであろう。

第二には、受入れ表明をした二自治体の地域史が問題である。両自治体に先住アイヌ民族は住んでいない。先行研究には寿都町のアイヌ人口が、19世紀半ばに天然痘で壊滅的に減少との記述がみられる（平山 2016：36-41）。そこに代わって入った和人が10万年に渡り管理を必要とする猛毒のごみを大地に埋めるという。

これは北海道全体を「アイヌモシリ」と捉える先住アイヌ民族から見ると、先住民族の環境権侵害である。

第三に、筆者が暮らす沖縄との比較を示唆しておきたい。日本全国を防衛するためとして米軍基地が沖縄に集中している現状と、日本全国の核のごみを北海道に集めて埋める計画はどちらも、明治期以前は日本ではなかった場所への差別であろう。東京でものごとを決める人々が、自身の思い入れの少ない土地を選んで迷惑施設を押し付けるという図式である。

しかし両者には大きな違いもある。アイヌの人々がアイヌモシリにおいてさえも少数派だという事実である。沖縄では基地建設に反対して、沖縄人が中心となって立ち上がる。容認の首長も、反対する首長も、みんな沖縄人だ。しかしアイヌの人々は北海道においても、そして多くのアイヌが比較的多く集住している白老のような場所でも、やはり少数派である。

本稿で報告したイベントの最後にステージに上がったアイヌの人々は、沖縄人が辺野古新基地反対の集会に出るのは異次元の、大きな勇気を必要としたのではないか。特にエカシやフチ<sup>6</sup>と呼ばれる社会的地位や生活基盤の整った長老の人々を除けば、舞台上でマスコミのフラッシュを浴びることにはどれほど勇気が要ったことだろう。

第四に、そして最後に、アイヌ民族の精神文化から学ぶ必要性を強調しておきたい。「人間のコントロールできないもの、土に還らないものは作ってはならない」というアイヌの掟は、まさに今、全世界で目指している「持続可能な開発目標（SDGs）」のうちの、「持続可能性」につながる思想ではないだろうか。

3.11の福島原発事故は、原子力が人間のコントロールできないものであることを証明した。そしてたとえ事故が起ころなくとも、通常運転をした原発から出る核のごみは土に還らない。アイヌ民族は古来より伝わるその思想で、私たちが今必要としている学びを提供してくれていると思えてならない。

## 謝 辞

貴重なお話を聴かせてくださったアイヌの皆様と本田優子札幌大学教授、そして北海道の市民の方々、同行案内をくださった元北海道護憲ネットワーク代表の瀬尾英幸氏に心よりお礼申し上げます。

<sup>6</sup> 「エカシ」に対応する女性の長老を指すアイヌ語。本稿では宇梶氏がこれに当たる。

本研究は2021年度宇流麻学術研究助成基金研究助成「先住民族と迷惑施設に関する研究—アイヌの人々と核関連施設—」をもとに実施した。ここに記して貴重な支援にお礼申し上げる。

## 参考・引用文献

原子力規制委員会HP (2021)「原子力発電所の現在の運転状況」

[https://www.nsr.go.jp/jimusho/untent\\_jokyo.html](https://www.nsr.go.jp/jimusho/untent_jokyo.html) (2021/12/29)

稗田一俊 (2005)『鮭はダムに殺された—二風谷ダムとユウラップ川からの警鐘』岩波書店

平山裕人 (2016)『アイヌ地域史資料集』明石書店

北海道新聞 (2021)「核ごみ反対 アイヌ民族も」11月22日付、

<https://www.hokkaido-np.co.jp/article/614248> (2021/12/25)

北海道新聞(2021)「シリーズ評論 核のごみどこへ 候補地選定 差別の構造」(吉井美知子インタビュー記事) 12月4日付、p.5 総合

飯島伸子 (2000)「地球環境問題における公害・環境問題と環境社会学—加害—被害構造の視点から—」『環境社会学研究』6、pp.5-22

核ゴミ問題を考える北海道会議HP, <https://h-nuclear-waste-problem.net/> (2021/12/26)

小坂洋右 (2015)『大地の哲学—アイヌ民族の精神文化に学ぶ—』未来社

野村保子 (2015)『大間原発と日本の未来』寿郎社

NUMO原子力発電環境整備機構HP, <https://www.numo.or.jp/> (2021/12/26)

西郷貴洋ほか (2010)「高知県東洋町における高レベル放射性廃棄物処分地決定に係る紛争の対立要因と解決策」『社会技術研究論文集』Vol.7, pp.87-98,

[https://www.jstage.jst.go.jp/article/sociotechnica/7/0/7\\_0\\_87/\\_pdf/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/sociotechnica/7/0/7_0_87/_pdf/-char/ja) (2021/12/27)

新聞「農民」(2020)「寿都町、神恵内村 文献調査に名乗り“核ゴミ”最終処分場」11月2日付、農民運動全国連合会

<http://www.nouminren.ne.jp/newspaper.pHP?fname=dat/202011/2020110203.htm> (2021/12/28)

関口裕士 (2021)『核のごみ 考えるヒント』北海道新聞社

外岡秀俊 (2021)「核ごみ 全道で話し、聴き、『共感』」朝日新聞11月25日付「道しるべ」欄

滝川康治 (1991)『幌延—核のゴミ捨て場を拒否する—』七ツ森書館

滝川康治 (2001)『核に揺れる北の大地』七ツ森書館

泊原発の廃炉をめざす会 (2012)『北海道電力〈泊原発〉の問題は何か』寿郎社

宇梶静江 (2011)『すべてを明日への糧として—今こそ、アイヌの知恵と勇気を—』清流出版

宇梶静江 (2020)『大地よ!—アイヌの母神、宇梶静江自伝—』藤原書店

八木健三 (1995)『北の自然を守る—知床、千歳川そして幌延—』北海道大学図書刊行会